

# 現場へ!

仙台市泉区の「いずみの杜診療所」。一見、地味な木造2階建ての奥の階段をあがると、おしゃべりが聞こえてきた。

ここで「ピアサポーター」として働く認知症の丹野智文さん(46)や星照子さん(76)たち当事者8人の交流会が始まっていた。

ピアとは英語で「仲間」のこと。ピアサポーターは、認知症と診断されてどん底を経験した人が仲間として、診断直後や通院する人とさっくばらんに話したり、相談にのったりする。認知症に「なったからこそ」できる仕事だ。

認知症はかつて「痴呆」とよばれ、「何もわからなくなる」「暴力や妄想で大変」と、医療や介護をする側の視点で語られてきた。だが20年ほど前から、本人が自ら思いを語り始め、2014年にはケアの「対象」から人生の「主人公」へ、をめざして、本人たちによる初の当事者団体が発足。政策を提言し、社会や地域、医療・ケアの現場を大きく変え始めた。最先端の現場、仙台を訪ねた。

診断から6年が過ぎた丹野さんは携帯を使うと「すごい!」と驚かれ、「認知症らしくない」と言われる。「認知症って、いきなり重度になるのではなく、必ずその前に初期がある。急に全部できなくなるわけじゃないよね」。みんなが「そうそう!」とうなずく。この診療所は、見過ごされてき

## 認知症当事者はいま①

た初期の人たちが、認知症当事者に出会う先駆的な場だ。診療所の一室で、元氣な先輩の存在と、絶望も正直に語り合える場の温かさが「希望」になっている。

丹野さんが隣で泣いている男性にささやいた。「僕も1年ほど、夜は涙が止まらなかったんだ。不安と恐怖だね」。生きる切なさ、情けなさもありのままに話す。

「でも、6年たってもこんなに笑顔でいられるよ。先を考えて不安にならないで、『今』を大切に、楽しく生きようよ」。ここでは困ったことだけでなく、「これから何したい?」とワクワクすることを尋ね、実現をめざす。実は、認知症以外の話がほとんど。心がほどけ、みんなよく笑う。

星さんは、28歳で居眠り運転の車にはねられて、左足を失った。3年前に認知症になってからも杖を手に出かける。手芸に野菜作り、障害者団体の世話役、ピアサポーターと忙しい日々だ。

「夜、義足を外してお風呂に入って、『今日はあの人に会えて良かったあ』って一日を思って眠るのね。よく道を間違えっけど、いい運動って思うことにしてんの」。認知症はその人の一部にすぎない。人生はもっと豊かで、今日も、今、ここで息づいている。

## 絶望も語り合える温かさ

15年に、丹野さんが仲間たちと日本初の「本人による本人のための相談窓口『おれんじドア』」を地元仙台の大学のカフェで始め、18年、医師の山崎英樹さん(59)に相談して、診療所でも始めた。厚生労働省も「本人の力」に注目し、全国に広げようとしている。

認知症が「痴呆」と呼ばれていた26年前、雪深い秋田の精神科病院の痴呆棟で、泊まり込みの取材を始めた私には、しみじみと感概深い変化だ。(生井久美子)



丹野智文さん(左)と星照子さん。「最初は泣いていた人が、笑顔になってくれるのがうれしいよね」=仙台市の「いずみの杜診療所」



星さん手作りのブローチ。ストラップなどの作品を交流会でみんなに贈る。「カメは私みたいにノロマ、でも万年生きたいなと思ってね」=いずれも中井征勝撮影